

第11回：「とよた森の音楽祭」を回想して

主席研究員 川井 真

1. 7年間の軌跡

少子高齢化の先進地域である三河中山間地域に「縮小しながら発展する未来」の姿を描き出すため、当研究所は2010（平成22）年からJA愛知厚生連^{あすけ}足助病院と協力してプロジェクト型の地域研究に取り組んでいる。その実践的な共同研究も今年で7年目を迎えた。

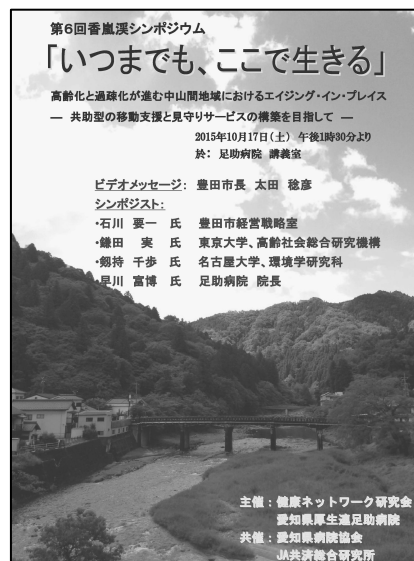
足助病院の早川富博院長とは「人の移動が地域の活性につながり、それを維持することがまちづくりの根幹であり、それなくして健康を守る保健・医療・介護ならびに福祉サービスの効率的な提供は不可能である」という共通認識のもと、住民が健康であるためには、まず地域そのものが健康でなければならないとして、活気あふれる持続可能な地域づくりを推進し住民どうしの活発な交流を促す仕組みづくりにも力を注いできた。

たしかに安全で安心できる保健・医療・福祉（介護）を提供することで中山間部地域住民の暮らしの安寧を保つことが足助病院のミッションであるが、高齢社会でこの役割を果たすためには、医療機関としての通常業務の枠を越えた、もうすこし開かれた活動が必要になってくる。とりわけ農山漁村地域の中核病院には、少なからず「まちづくり」という意識が求められてくるのだろう。振り返れば、広大な診療圏に住まう住民とりわけ山間部集落に住まう高齢者の移動手段を確保するため、オン・デマンド交通システムの大規模な試行実験を行ったこと、あるいは交通と医療

情報を統合したICカード「あすけあいカード」の開発と実用化を積極的に推進したことなども、医療機関としての業務の枠をあきらかに超えている。

2. 自然と共生できる文化的地域づくり

足助病院の理念、その後段には「中山間部地域住民の生活を守り、自然と共生できる文化的地域作りに貢献する」という意志が掲げられている。足助病院では秋の例年行事として、勉強会と討論会を兼ねた「香嵐溪シンポジウム」という住民参加型の文化イベントを開催しているが、このような活動もまた、病院理念を具現化したものである。毎秋、“香嵐溪”が色づくころに開催される本シンポジウムは、地域住民の思いが交響する場であり、住民どうしの相互理解を促し、世代を超えた



意見交換の機会を提供している。まさに秋の祭典、文化的地域づくりのための「まつり」である。

たしかに「まつり」は超自然的存在すなわち「神」への様式化された行為であるから、神さまをお迎えし、もてなし、お送りするための一連の儀式を意味する。それを前提とするならば、神さまのいない「まつり」はたんなるイベントに過ぎないのかもしれない。しかし「まつり」には、日常の生活に「ハレ」の時間と空間をつくり出し、演じるものと見物するものとを一体化させ、世界観をひとつに統合するような機能も内包されているように思える。したがって、たとえそれが神社とは無関係な世俗的な行事であったとしても、非日常の空間で世代を超えたコミュニケーションが生まれ、人々のつながりを強固なものにしていくことだけは確かだろう。

あえて付言するならば、古来、この土地には多くの神々が存在する。日本人にとっての「神」は自然である。奥三河地域には太陽の力の復活を願う神事芸能「花祭」が、自然が力を失うとされる冬至の前後に行われる。この「花祭」は700年以上にわたり継承される伝統行事で、国の重要無形民俗文化財にも指定されている。また足助診療圏に位置する多くの地域では伝統的な盆祭りも盛んである。したがって都市生活者とは異なり、自然と共に生きてきた三河中山間地域の人々、とりわけ高齢者の心の内には、万物に精霊が宿るといった自然崇拜にも似た感覚が、いまでも少なからず残っているのだろう。そもそも「まつり」は、自然と共生していくことの大切さを相互主観的に感受するために人類が生み出した知恵でもある。したがって、それが文化的地域づくりのための世俗的な祭典であったとして

も、この地域であれば、伝統的神事である本来の「まつり」が担った役割の一部を再現することができる、そのように思えるのである。

3. あたらしい「まつり」の創造

足助病院では今春、「とよた森の音楽祭」という音楽の祭典を試行的に開催した。秋の祭典である「香嵐溪シンポジウム」を見据えて、春の恒例行事として検討してきた音楽祭である。たしかに「まつり」と音楽もしくは芸能には密接な関係がある。神さまをもてなすために奉納した神楽が民俗芸能のはじまりとされるが、伝統的な「まつり」のなかで生み出された多彩な音楽や演劇は、悠久のときを越えて現代に受け継がれている。とりわけ愛知（三河）と静岡（遠州）と長野（信州）を結ぶ山間部いわゆる三遠南信地域は民俗芸能の宝庫とされ、昭和初期には柳田國男、渋沢敬三、折口信夫、そして早川孝太郎といった民俗学の著名な研究者が、この地域で活動している。いずれにしても高齢化と人口減少で活力を失いはじめた三河中山間地域に音楽の祭典というあたらしい「まつり」を定着させることは、足助病院が取り組む文化的地域づくりとして、あるいは「まちづくり」という観点からも、とても大切な意味があるものと思える。

「とよた森の音楽祭」は足助病院文化実行委員会が主体となって企画・立案と運営を担当し、開催の準備は病院役職員が一丸となって進めた。ポスターとチラシを作成して病院内に掲示し、病院広報誌ならびに地域フリーペーパー『耕Life』には開催案内を掲載した。またJAあいち豊田の広報誌『グリーンボイス』や自治区の回覧板にもチラシを同梱して配布し、事前の広報に努めた。さらに近隣の小学校等を訪問して開催告知を行い、音楽祭

への出場と参加を呼びかけた。そしてついに今年6月4日（土）、第1回「とよた森の音楽祭」が足助病院パティオで開催されたのである。

このような盛大な音楽祭を開催することができた背景には、多くの理解者と協力者の存在があった。JAあいち豊田、JA愛知東、アサノエンタープライズ、株式会社光洋や、外部からは、シダックス・ウェルネス・ライフサイエンス研究所が運営する「健全・健康な社会の実現」と共有価値の創造を探究する研究会のメンバーである、味の素株式会社、花王プロフェッショナルサービス株式会社、カゴメ株式会社、シダックス株式会社、株式会社第一興商も参加して、三河中山間地域の音楽の祭典「とよた森の音楽祭」は演出されたのである。「音楽（集い歌うこと）を通じて地域住民のコミュニティ活動促進及び健康増進に寄与する」ことを目的に、産と民が協同あるいは協働して開催した音楽祭、それは社会協働あるいはトライセクター（tri-sector）

における実験的な試みとしても、新たな可能性を示唆するものとなった。

4. おわりに

音楽祭を振り返れば、たしかに足助病院の中庭には「ハレ」の空間が出現し、演じるものと見物するものとを一体化させていた。老若男女の境をなくし、世代を超えたコミュニケーションが会場内のいたるところで交わされていた。そしてときおり、人間ドラマも垣間見ることができた。「ハレ」の日に向けて歌と踊りの練習を重ねてきた子どもたちの笑顔、その光景に誰もが癒され、また長期入院中の奥様のためにステージで見事な歌声を披露した御主人と、周囲の人たちに「ありがとう」の言葉を繰り返し伝えようとしていた奥様の涙、この仲睦まじい老夫婦の姿に会場全体が感動に包まれた。三河中山間地域の音楽の祭典は、たしかに「まつり」であった。

気がつけば、足助病院の中庭に「むすびの神」が鎮座していた。

とよた森の音楽祭
music festival in Asuke

進行 Program
※詳細は裏面参照

13:00	開始
13:05	足助高校吹奏楽部
13:20	カラオケⅠ部
13:50	足助高校有志
14:05	カラオケⅡ部
14:35	足助中学校プラスバンド部
14:50	カラオケⅢ部
15:20	足助病院看護部
15:30	カラオケⅣ部
16:00	山里合唱団こだま
16:15	表彰

飲食店 shop

アイス 200円
クレープ 400円

ドリンク各種 200円～420円

五平餅 100円

協力
JAあいち豊田 JA愛知東 JA共済総合研究所
SHIDAX 第一興商 KAGO KAGOME
AJINOMOTO

「とよた森の音楽祭」フォトアルバム

